

福祉学習

4年生が12月7日に福井県立盲学校の岡島先生をお招きして、福祉学習を行いました。

岡島先生ご自身も目が見えにくく、その見える様子をビデオで確認すると、画面全体が白くぼやけているようでした。これまで、

「障がい者」は身体どこかに「障がい」がある者と考えられてきましたが、「障がい者」は特別な人なのだろうか先生が子どもたちに問いかけることから学習がスタートしました。



説明される岡島先生

最初に「普通の人」「障がい者」の呼び方について、バリアフリーの視点で考えていきました。先生は、「もし文字のない点字教科書になったら賛成するか」と質問したところ、ほとんどの子が反対と発言し、「わざわざ使うのがいや」「文字が読めなくて不便」等を理由に挙げました。すかさず先生は、「印刷された教科書を読むことが出来ない人にとって、今の教科書はどうだろうか」と子どもたちに投げかけました。目で文字を読み取ることが出来ても点字を読めない子どもたちにとって、点字教科書だけの社会になれば、みんなが読書障がい者になってしまうと気づかされました。このことから、障がい者とは、障害のある社会に住んでいる人のことであり、多くの方が便利に使える物を使えないことが障がいであると説明されました。



岡島先生とジャンケン

次に、みんなが便利に暮らせる社会作りについて考えました。先生が、どんな仕組みがあればいいかと問いかけると、子どもたちはバリアフリーについて関心が高いとみえて、「点字と音声が入っている教科書」「階段だけでなく、エレベーターやスロープ」と返ってきました。このような目に見えるバリアフリーに留まらず、お互いに支え合う「心のバリアフリー」があれば、障がい者は特別な人ではなく、みんなが不便なく暮らせる社会になっていくと強調されました。



ガイドヘルプの模範

この後、目隠しをしながらのゲームで、目の不自由な生活について疑似体験しました。目が見えなければ、声に出してジャンケンをしたり、周りの人に声をかけながら動いたりすることが大切だと感じ取りました。

次に、みんなが便利に暮らせる社会作りについて考えました。先生が、どんな仕組みがあればいいかと問いかけると、子どもたちはバリアフリーについて関心が高いとみえて、「点字と音声が入っている教科書」「階段だけでなく、エレベーターやスロープ」と返ってきました。このような目に見えるバリアフリーに留まらず、お互いに支え合う「心のバリアフリー」があれば、障がい者は特別な人ではなく、みんなが不便なく暮らせる社会になっていくと強調されました。



目隠ししてゲーム

この後、目隠しをしながらのゲームで、目の不自由な生活について疑似体験しました。目が見えなければ、声に出してジャンケンをしたり、周りの人に声をかけながら動いたりすることが大切だと感じ取りました。